

私小説の神様といわれた 葛西善蔵

一九八七年（昭和六十二）七月二十三日から四日間、弘前市文化センターを会場に、葛西善蔵生誕百年記念展が、弘前市教育委員会、青森県郷土作家研究会、葛西善蔵文学顕彰会の共催で開かれた。展覧会の開催に当たって、青森県郷土作家研究会長小山内時雄氏は、葛西善蔵の文学と生涯について、簡潔な筆で次のように述べている。

葛西善蔵は弘前市に生まれ、青年初期北海道を放浪したが、上京して哲学館大学（現東洋大学）に学び、文学に賭けて大洗に遊んだ。一九一二年（大正元）創刊の同人雑誌『奇蹟』に拠って文学生活に入り、「哀しき父」「悪魔」等を発表した。文壇に認められるに至らず、雌伏すること四年目にして「贗物」「姉」で一部に知られ、一九一九年（大正八）、創作集『子をつれて』を新潮社から刊行するに及んで漸く新進作家としての地位を文壇に確立した。同年、信州別所温泉に遊んでは異彩の作「不能者」を残し、年末、鎌倉建長寺塔頭宝珠院に独居して「暗い部屋にて」「不良児」「春」その他を成した。一九二三年（大正十二）関東大震災後は東京本郷区（現文京区）弓町の西城館に移っては秀作「椎の若葉」を、また、奥日光湯元湯泉に身を潜めて名作「湖畔手記」を成した。晩年、世田谷区三宿に居を移して「酔狂者

の独白」を口述によって残した。

葛西善蔵は一八八七年（明治二十）一月十六日、青森県中津軽郡弘前松森町一四一番地に生まれた。父宇一郎、母ひさの長男で、姉二人と曾祖母、祖母、叔母の家族であった。葛西家は曾祖父善司の代、屋号を「境屋」といい、こうじつくりみそ糘造味噌、あらいものこまもの荒物小間物、塩小売、米小売、穀物などを手広く商い、間口九間（約一八メートル余）、奥行二十四間一尺（四八メートル余）の店構えだった。間口が三間（六メートル余）か四間（八メートル余）が普通だった松森町町内で、「境屋」はもつとも大きい方だった。善蔵が生まれたとき、父宇一郎は米の仲買を業としていた。

善蔵が三歳のとき、葛西家は没落して家屋はもとより畑地まで売り払って、北海道後志国寿都郡寿都に移住した。その後、一家は北海道嶋牧郡本目村ほんめに移り、一八九一年（明治二十四）善蔵が五歳のとき、青森県東津軽郡青森町たほこ荻町に移った。さらに一八九三年（明治二十六）一月、一家は北津軽郡五所川原村に移り住んだが、この年の四月、善蔵は五所川原小学校に入学した。

しかし、同年五月善蔵の一家が南津軽郡碓ヶ関村四十八番戸の母の生家に転居したので、善蔵は碓ヶ関尋常小学校に転校した。

善蔵がはじめて文学を志したのは、碓ヶ関尋常小学校卒業後、同校補習科に学んだ十二、三歳のころといわれている。同校に石田政蔵とい

う雇教員がいて、善蔵は石田先生に感化された。少年時代の善蔵は、多感な性質で、山野を歩いては自然の美しさをうたい、散文詩のような短文を、ノートや日記に書いた。また、山を歩き、谷川を上り、興きょうが湧くと大声で即興の言葉を吟じたという。石田先生は、感傷的で、どこか神経質な善蔵少年を愛し、善蔵の文学的才能を静かに守り育て、励ましてくれた。この先生の影響が、後年の善蔵を文学者にし、善蔵自身も「おれを文士に仕込んだ一人が石田先生だ。」と語っていたという。

一八九九年（明治三十二）三月、碓ヶ関尋常小学校補習科を卒業した善蔵は、伯母しまが嫁いでいる五所川原村神家じんの別家で、質店を営む神重三郎の手伝いをした。神家の土蔵の二階には多くの書籍が置いてあり、読書好きな善蔵はその中から『三国志』や『椿説弓張月』、『里見八犬伝』などを愛読したが、この時の読書が、後年文学を志す素因となったと思われる。善蔵にとって、五所川原の生活はかなり快適なものだったらしく、のちに「少年の日」と題し、その思い出を次のように語っている。

僕は弘前で生まれましたが——少年の日の思い出となると五所川原の話がしたいね。小学校も五所川原にしばらく上がりましたよ。一昨年しんの冬に、ちょうど亡父の法要で浪岡へ帰ったついでに五所川原へも行ったが、随分変わっていますね。僕の親父の姉は五所川原の神家へ嫁いでいたものですから、その関係で僕は少年時代五所川原に住むことになったものですが、今青森で病院を開いている神（竹之助）博士

はその父の姉の子というわけです。僕は少年時代竹之助さんには可愛がられて、よく田圃^{たんぼ}へ魚や虫をとり連れられて出掛けました。その

竹之助さんはなかなか利^きかない少年でしたので、僕はその子分格で大いに肩を広くして歩いたものですね。はは（と淋しいような笑い）僕の仲よしに平井町に平^{ひら}のおんじというのがあってよく相撲をとったりして遊んだものさ。僕が大きくなって文学をやるようになった素因はやはり五所川原の少年時代の生活当時に作られたものと言えますね、それは神さんの先代も御承知の通り御医者さんでありまして、竹之助さんの親という人はそれはそれは立派な人で維新の当時、長崎まで医学を修めに行った位の人でしたが、子どもは竹之助さんと、その姉さんのたかさんという二人きりでしたので、たかさんに婿^{むこ}を迎えて、その婿の重三郎さんに質屋のほうをやらせていました。只今は分家してたかさんの息子の伊三郎さんが紙屋を始め、質屋もやはりやっていますよ——それで僕は小学校を出て間もなく、しばらく重三郎さんの手伝いをして質屋の帳場に座ったことがあったよ。——ちよつと変わっているだろう。まったく——ところが、重三郎さんは商用で旅行したりして留守になると、僕は早速蔵へ飛んで行って、古い本を捜^{さが}したものです。

里見八犬伝なんか、ほこりをはたきはたき愛読、おかなかつたね。それですっかり文芸ものに趣味をもってしまったんだ。つまり蔵の中の八犬伝が病付^{やみつ}きで、碌^{ろく}でもない小説家になったというわけですよ。はは……僕は誰よりも神の伯母さんがこわいんです。よく叱^{しか}られたものだし、今だって行けば叱られるね。一昨年も五所川原に行った時、いろいろと叱られて顔が上らなかつたね。しかし、根が大へん親切な

良い人ですから思い出すとなつかしいですね。その時、伯母さんの所から、分家の重三郎さんのところへ廻って、伊三郎さんと、さかんに飲みましたよ。伊三郎さんという人は三田（慶応義塾大学のこと）の理財科を出た人ですが、百円や百五十円の月給取りをしても、下らな
いといって、前掛がけで紙屋をしています。僕はすっかり感心しましたね。——（談、大正十五年「少年の日」）

翌一九〇〇年（明治三十三）、十四歳になった善蔵は、青森市米町の運送店『仲利』へ丁稚奉公に出された。善蔵の父が碓ヶ関で運送店を始めていたので、商売見習いのための奉公だったが、すでに文学の世界に魅^みせられていた善蔵には、丁稚奉公は無理であった。

一九〇二年（明治三十五）、十五歳の善蔵は初めて上京した。東京で学問したいという希望を抱いての上京だったが、家からの仕送りもなく、善蔵は新聞の売り子をしながら、夜学に通って勉強した。しかし、母ひさが病氣との知らせを受けて、やむなく帰郷した。が、間もなく、母は流産がもとで死去した。母の死について善蔵は何も書いていないが、おそらく深い悲しみに沈んだにちがいない。その翌年、善蔵は春を待たずに北海道放浪の旅に出るが、それは母の死と無縁ではなかったであろう。

善蔵は北海道に一年半ほどいたが、その間、北海道炭鉱鉄道会社の車掌をしたり、営林署に雇われて、山奥で杣夫^{そまふ}と一緒に坑木の伐採に従事したりした。その下山中、猛吹雪に遭った善蔵は雪おんなの幻想を見るが、のちにそれを小説「雪をんな」に書いている。北海道の一年半

の労働は、辛く苦しいものだったろう。善蔵は小説「悪魔」の中で、北海道放浪のことを「俺は忍路高島を唄はう、忍路高島は俺の少年の夢だ。俺は少年の夢を抱いて忍路高島を放浪したのだ。俺の胸は火であった。けれども俺は凍え死なうとした。がもし俺があゝの当時に死んでゐて呉れたら……あゝ少年の夢よ！俺にも今では忍路高島も歌へない。俺には全く醜い歌しかうたへない……」と書いているが、善蔵が燃ゆる思いと少年の夢を抱いて北海道に渡ったことが良くわかる。しかし、その夢も冷たく厳しい現実にはいたずらにゆさぶられるだけだった。

小説「雪をんな」の主人公が、北海道をあちこちとさまよい歩くうちに、その放浪生活は決して自分の本当の生活でないことを悟り、「さうだ！帰るべき時だ、帰らねばならぬ時が来たのだ。」と言っているように、善蔵もまた北海道の生活を切り上げて、東京へ出る決心をする。「文学だ、文学をやるう！」そう心に決めて善蔵は再び上京した。

一九〇五年（明治三十八）、上京した善蔵は哲学館大学（現東洋大学の前身）の大学部第二科普通講習科に入学する。だが折角入学したものの無断欠席が多く、翌一九〇六年（明治三十九）に大学を除名される。が、宗教の講義だけは熱心に聴いたという。善蔵の作品を見ると、初期のものには宗教的色彩が濃く出ていて、宗教に深い関心を抱いていた事が分かる。講義は怠けがちだったが、善蔵は図書館へはよく通った。さかんに文学書を漁り、余暇に創作の筆を執つたらしいが、その時はまだ発表するような作品ができなかった。

一九〇八年（明治四十二）、二十二歳のとき善蔵は郷里碓ヶ関に帰り、南津軽郡浪岡村の平野弥亮長女つると結婚した。が、妻を郷里に残

したまま上京、友人佐藤英七の紹介で、作家徳田秋声に師事した。当時徳田秋声は自然主義派の大家と目されていたが、小説の技術面で影響は受けたものの、善蔵の文学は自然主義派ではなく、善蔵独自の、芸術派の文学と称すべきものであった。だが、この時点でも善蔵はまだ作品を発表していない。

一九〇九年（翌四十二）五月、こんどこそ本格的な創作を書こうと、茨城県大洗海岸の小林楼に投宿して、執筆に没頭した。大洗の宿に五ヶ月ほど滞在して七、八十枚ほどの作品を書いたが、それも大洗を引き上げる前日、引き裂いてしまった。善蔵は苦心に苦心を重ねて書き、書いてはこれを自分の手で破った。自分自身が満足しない作品は惜し気もなく引き裂いたのである。こうした傾向は善蔵が小説家として文壇に出た後も続いた。善蔵は生涯、

「自分は作をしてゐて、感興に乗って来たら、そこで筆を擱く。感興に乗ったら、つい嘘を書くことになるから。」

と言っていたというが、これが善蔵の創作態度であった。筆に委せて書き散らすことのできない作家であり、真実しか書こうとしない作家であった。宇野浩二は善蔵のこの言葉を評して、「こんな言葉を言ふ作家が、天才でなくて、何処に天才があらう、この一句は、世界のあらゆる作家に聞かしてもいゝと思ふ。若し、葛西の碑でも建って、この文句を刻んだら、石川啄木碑や、島崎藤村碑にあるセンチメンタルな詩歌の文句は、悉く消えてしまふであらう。」と賞讃している。「感興が乗って来たら、そこで筆を擱く。」というような作家は、日本の文学史

上、葛西善蔵ただ一人ではなかるうか。感興に委せて書くことで、筆が上滑りすることを自戒したのであるうが、それだけに善蔵の小説は、まさに肉をそぎ、骨を削るような文字をもつて真実を書き貫いたのである。

一九一一年（明治四十四）三月、善蔵は友人光用^{みつもちきよし}穆を通じて、舟木重雄を知った。舟木と善蔵は終生厚い友情に結ばれるのであるが、同じ年、舟木を通じて善蔵は広津和郎とも知り合った。これら友人たちの間で同人誌発行の話が出て、翌一九一二年（明治四十五年、七月大正と改元）九月、雑誌『奇蹟』^{きせき}が創刊された。同人は善蔵をはじめ、舟木重雄、光用穆、相馬泰三、広津和郎、岩崎精二らであった。『奇蹟』創刊号に善蔵は、葛西歌棄^{うたすて}の筆名で「哀しき父」を発表、これが善蔵の処女作となった。この作品は広津をはじめ、『奇蹟』の同人たちもちろん、菊池寛や久米正雄、芥川龍之介などの作家たちからも、問題作として注目された。その後、善蔵は『奇蹟』に「悪魔」「池の女」「メケ鳥」などの作品を発表したが、善蔵の作家としての名は一部の人々に知られただけで、『奇蹟』は資金難のため廃刊になった。以後四年の間善蔵の雌伏が続く。この間も血のにじむような善蔵の勉強は続くのだが、作品は発表されなかった。しかも赤貧洗うがごとき貧乏生活で、妻子をかかえた善蔵は、金策のため東京と郷里をしばしば往復する。

一九一七年（大正六）二月、これまでの沈黙を破って、善蔵は『早稲田文学』に「贖物」を発表、この小説が善蔵が作家として、原稿料を稼いだ最初のものであった。しかし原稿用紙一枚がわずか十銭の稿料にすぎなかったという。晩年の善蔵の稿料は一枚八円と決まっていたと

いうが、稿料が八十倍になったわけで、それらを思い合わせると興味が深い。

翌一九一八年（大正七）三月、善蔵は『早稲田文学』に「子をつれて」を発表したが、これによって文名が一举に揚がった。「子をつれて」は、善蔵が妻つるを金策のため郷里に帰したあと、二人の幼児をつれて都会をさまよう出来事を書いたものだが、簡潔で的確な文章が注目を浴びたのである。「——何等の説明も加へず、また些いささかの詠嘆もなく、只た事実をありのままに簡単に率直に描いて、あんなに痛切に深刻に、子の父としての主人公の愛と涙に充ちた心の動揺、苦悶くもんを髻髻ほうふつせしめた作者の伎倆ぎりょうは真に驚嘆に価する。」という加能作次郎の激賞の批評が雑誌『新潮』に掲載されたが、このような批評が各誌に発表されたことから「子をつれて」が、いかに傑作としてもはやされたかがわかるであろう。しかしこの傑作に支払われた原稿料も一枚わずか十七銭というから、文名があがったにもかかわらず、善蔵の貧乏生活は相変わらずであった。

善蔵は一般に私小説作家と言われている。善蔵自身は自己小説と言っているが、自分を偽ることなく、自分の生活、心境、周囲を正直にありのままに書いた。しかも書いては破り、破ってはまた書き、また破るといふ書き方なので、筆は遅々としてすすまず、一篇の作品は文字通り骨を刻み心に彫りつけるようにして書かれた文章だった。それだけに寡作かであった。宇野浩二は『葛西善蔵』と題する文章の中で、彼の寡作を指摘して「この稀まれな天才（私はさう思っている）作家は、大正元年九月——彼が二十六歳の時——から、同九年四月迄まで、八年の間に、百

枚余の短篇一篇の外、大抵三十枚以内の短篇二十三篇を書いてゐるだけである。」と言ひ、善蔵がその文学生活十六年の間に書いたのは二枚。年間（平均）わずか百二十五枚しか書かないことになり、おそらく寡作家の筆頭だろうと述べている。善蔵が寡作だったのは、その才能が不足だったからではない。書く素材を見つけると、素材を錬りに錬つて、それを表現する言葉や文章を徹底的に選び出す。全身全霊のエネルギーを傾注するため、他の作家たちのように、多作や濫作がでなかつたのである。

善蔵の文名は高くなつたが、寡作のために貧乏生活はつづいた。そのうえ善蔵の飲酒癖が貧乏生活に拍車をかける。善蔵は文壇きつての酒豪といわれたが、生来の酒好きで十二、三歳ごろから飲み始めたという。その飲み方も小さな猪口でちびりちびりと、なめるように一日中飲み続けるというふうで、善蔵最後の作品「酔狂者の独白」（これは口述したのを嘉村磯多が記録した）の中で「一年でどれだけ飲んだらう、一日一升として年に三石六斗余り、一升五合平均とすれば、ざっと五石、毎月四斗樽一本ずつ飲んで来たわけである。」と書いていることからも、その酒豪ぶりが知られる。

このような大酒が健康にいいはずがない。一九三三年（大正十二）三十七歳のころから、善蔵の体力が次第に衰えを見せ始める。善蔵はその前年から肺浸潤と診断されていたのに、一向に改まらぬ飲酒が、急速に体力を奪つたのである。体力の衰えとともに、創作力も衰え、その苦悩をまた酒によって、まぎらわせた。そのころの善蔵の酔態、狂態はさまざま伝えられているが、そんななかで名作「椎の若葉」や「湖

畔手記」が生まれる。宇野浩二は「湖畔手記」について「或^{ある}意味で、葛西の小説の或^{ある}一つの高峰（彼の一生の六十七篇の連作を山^{やま}脈^{なみ}に譬^{たと}へたら）である。この『さびしき妻より』から『さびしき夫より』の一章は、古今東西の文学の中、類を絶した文学である。」と述べ、さらに宇野は「湖畔手記」の最後の章について「葛西善蔵は如何なる哲学者よりも如何なる善智識よりも、如何なる芸術家よりも、偉大である。明治大正昭和の日本文学にこれ程の作があったか。否、古今東西の文学にも、これ程の作、この作より傑^{すぐ}れた作はあったか。」とまで激賞している。

一九二五年（大正十四）善蔵は三十九歳。このころからしばしば咯^か血^{けつ}するようになり、病勢が進み、それに生活難^{せいかん}が加わり、さらに複雑な家庭問題にわずらわされて、善蔵の生活は荒^{すさ}みはじめ、住居も転々とした。

一九二七年（昭和二）一月「酔狂者の独白」を口述したあと、五月、芝白銀台町の伝染病研究所附属病院に入院、十月、神奈川県片瀬七里ヶ浜鈴木療養所に移り、十二月、世田谷三宿の自宅に帰る。

翌一九二八年（昭和三）三月、病勢いよいよ募^つり、しばしば咯^か血^{けつ}する。七月に『葛西善蔵全集』（全五巻）の第一巻が改造社から出版されたが、同月二十一日、絶望と新聞に報道される。二十二日、肉親、知友と別れの盃^{さかづき}を交わし、二十三日夜、永眠した。行年^{ぎょうねん}四十二歳。善蔵の盟友谷崎精二は臨終のようすと、彼を悼^{いた}む言葉を次のように書いている。

世田谷三宿の陋屋へいおくでベッドに瘦せた身体を横たへてゐた葛西は、一九二八年（昭和三）七月二十三日夜次第に息づかひが苦しげになり、片手の指を頻しきりにもがかせてゐた。

「どうした？」

筆者（谷崎）が彼の顔を覗のぞき込んだ時、葛西はもう半ば意識を失つてゐた。

「切符！ 切符！」

再び指先を顫ふるはせながら彼はかう叫んだ。そしてこれが彼の最後の言葉であつた。

切符！ 切符！ 彼は何の切符を求めたのであらう。故郷へ帰つて死にたいのが彼の最後の望みであつた。おそらく葛西は上野から郷里碓ヶ関迄の切符を買ひ求め、汽車に乗込む事を空想してゐたのだらうと思はれる。居合せた人たちは暗然とした気持になつて、彼の遺骸いがいに合掌がつしやうした。

個性を唯一無二のものとして尊重し、葛西の所謂いわゆる現実を否定する事によつて芸術に生きようとする傾向は大正文壇特異の物で、さうした態度を作家が確立する事は二度と許されない事かも知れない。自己小説家の最高峰として永遠に日本文壇に足跡を留むるであらう葛西善蔵は、半面又時代の悲しき犠牲者であつたとも言へる。

葛西善蔵の戒名は芸術院善巧酒仙居士、弘前市新寺町の菩提寺徳蔵寺に葬られた。なお一九八一年（昭和五十六）九月、善蔵三女ゆう子によつて、善蔵ゆかりの鎌倉建長寺塔頭回春院に墓碑が建立され、弘前徳蔵寺より分骨された。

参考文献 小山内時雄編『葛西善蔵全集』一九七三年（昭和四十八）津軽書房

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、二六六～二七八頁